

滝久雄著「貢献する気持ち - Homo contribuens ホモ・コントリビューエンス - 」

紀伊國屋書店 2001年5月30日刊を読む

貢献する気持ち - Homo contribuens ホモ・コントリビューエンス -

- 1 . 社会や、そこで暮らす人々の生活様式がどんなに変化したとしても、人間としての生き方の原点は決して変わることがない。言い換えれば、そのように不変な人間性を考えることから、複雑な現代社会の全般を解きほぐす糸口が見えてくるのである。
- 2 . ところが、私たちは新しい哲学の必要性を感じていながら、思考停止を繰り返す。複雑な迷路に迷い込むよりは、考えることをとりあえず留保してしまう方が、自分の人生にも、また社会とのかかわりにおいても、簡明に生きられることを体験的に心得ているからである。
- 3 . しかし、大切な問いかけを前にして、うまく思考を停止できたその時であっても、私たちは自分の人生や他者との関係性に満たされない思いを残すことがある。どうしても自分の歩んでいる現実が曖昧で、自分そのものの存在が不完全に思ってしまうからではなからうか。何らかのインスピレーションがないかぎり、このような曖昧さの迷路から飛翔することはなかなかできないものだ。
- 4 . だが取っつきにくく複雑な、しかし大切でもある問題の解法をもたらしてくれる考え方がある。それが「貢献心は本能である」ということなのだ。
- 5 . この発想は現代に暮らす私たちにとって、いわば「人生の補助線」になる。つまり幾何学の答えがたった一本の補助線で一瞬にして導かれるように、もし人生の折り節で迷ったとき、このような認識があれば、私たちが進むべき行方を示してくれる道しるべになるだろう。また社会にとっては、進むべき方向を示すセンターラインになるかもしれない。
- 6 . 「貢献心は本能だ」と心得ていれば、多くの人々が行き着く先には健康で幸せな人生と、心やすまる豊かな社会がひらけてくるかもしれない。たとえば子どもの世界からは心のすさみや、それによる陰湿ないじめといった問題はおそらく影をひそめるだろう。17歳の犯行や同世代による乱暴も、キレた大人の無差別な殺人事件も、オウムのような反社会的カルトもまた、その思考法により解決される領域の埒外(らちがい)ではない。

7. では「貢献心は本能だ」といった考え方の、どこにそんな力が秘められているのだろうか。他人のために尽くすことを考えるとき、それを目指す心の背景に「本能」を位置づける方法は、「貢献は美德である」といったありきたりな発想法とニュアンスを異にする。「貢献心は本能だ」という考え方のもとでは、他人に尽くす行動をはなから称賛しはしない。むしろ、それを食欲や性欲などと同等な本能と見なすことによって、貢献心を本能の一つとして受け止めてしまうのである。しかし、けっして本能を悪いものと決めつけることもなく、逆にそれを重んじる必要もない。ただ自分を何かに役立てたいとする欲求が、人間の自然なあり方と考えることが大切で、そこに新たな哲学が見えてくる。

8. 手短かに述べてしまえば、「貢献心」という言葉に「本能」という言葉をつけ合わせたところに、新しい知の力が生まれてくるのだ。一見、結びつきそうにない二つが融合してもたらされる哲理で、そこには人や社会についての斬新な考え方の出発点がある。同時にその哲理は、人々の生活や仕事のさまざまな側面を活性化させる触媒の働きを社会全体に及ぼすはずだ。

9. ふつう、心理学で本能とは、生まれもって備わっている欲求や欲望などを示す。つまりそれは、学習して獲得される知的なものではなく、遺伝的にプログラムされて自然に湧き出してくる要求と考えられている。たとえば米国の心理学者 A・H・マズロー(1908 ~ 70 年)によれば、本能に起因する欲求は生理的な欲望であり、もっともプリミティブで身体的な動機を統括するものと考えられている。

10. 他方、一般的には貢献を目指す心は、人間のもっとも高尚な知性を実現させる手段と考えられ、むしろ精神的にも磨かれた「自己犠牲への希求」に起因するものであるとされてきた。つまり従来から、貢献しようとする志とは自分を取り巻く他者や、彼らが暮らす社会、文化、環境などに対して心が開かれ、愛がこれらに向けられたときに現れる人間の性質の一つであると考えられているのだ。

11. ところが「貢献心」を本能として、自分を他者のために役立てたいと志す自然な気持ちを「自然から授けられたもの」と見るのが、これから私が主張するところである。それは知性からのものではなく、生まれながらに備わっている本能に起因していて、自然に湧き出してくるものである。つまり「貢献心」とは、けっして後天的なものではなく、むしろ先天的な欲求なのである。

12. もしも人間にそのような本能があるとするならば、そこには今まで見えなかった新しい人間像が生まれてくる。私はそれをラテン語で「ホモ・コントリビューエンス」(Homo contribuens)、いわば「貢献仲間」と名づけたい。

この考え方にあって貢献を目指す心は、食欲や性欲などの生理的欲求と同じ現れ方をする。そのため「他者に尽くすことが善い行い」といった動機がないと発動できないものではなく、私たちが自分のために表現する欲求の一つとして、きわめて自然に生まれてくるものなのだ。

13. このような考え方を突き進めていくところに見えてくる「自己」と「他者」、そして両者が織りなす「現代」について考えてみたい。第一に、私をはじめて哲学的な出来事に出会った個人的な体験からはじまって、それをギリシア哲学史の流れにたとえながら、当時の思想の背景にも貢献心の思考法が発見できることを解説する。第二に、「貢献心は本能なのだ」と観ずることで得られる認識と、そう考えることではじめて自分の人生に応用できるようになる思考法について述べてみたい。第三に、できるだけ身近な例を取り上げて「貢献心は本能だ」といった考え方に基づいて「自分」や「社会」、「現代」を分析し、時代の方向性を探り、新しい人間観・社会観・企業観を模索したい。

[コメント]

Homo contribuens、貢献仲間、何という素晴らしい考えであろう。「こどもの日」に最も似つかわしい本書だ。

- 2011年5月5日林 明夫記 -